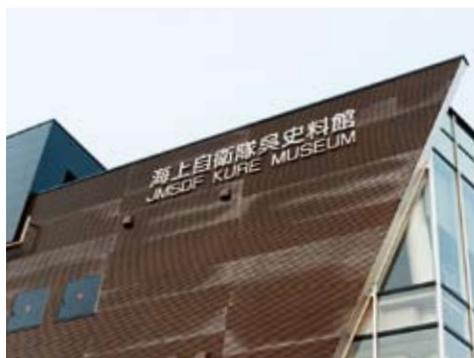


呉

大和ブームに沸く港町に 突如現れた潜水艦の使命とは？



写真◎新井卓

長さ76・2m、重さ2250t。頭上に浮かぶ巨体は2004年に退役した潜水艦「あきしお」。「昔かたぎのサブマリナー（潜水艦乗り）からは当初、陸揚げに反発もあったんですよ。しかし潜水艦の下をくぐってミュージアムに入るといってもなかなかない体験でしょう？」と柳川利生さん。柳川さんは今年4月にオープンしたこの海上自衛隊呉史料館、通称「てつのかくじら館」を事務局長として切り盛りする。

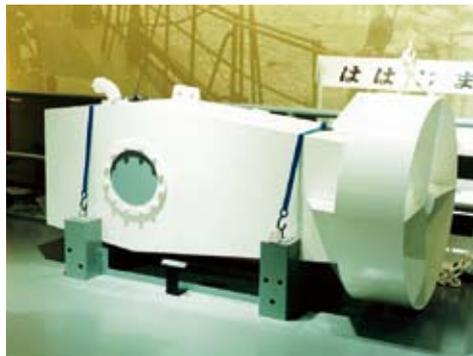
館のテーマは潜水艦と掃海。どちらもここ港町・呉とはゆかりが深い。掃海とは機雷の除去作業。第2次大戦で日本近海には無数の機雷が残され、その掃海に命がけて携わり、復興に尽くした人々がいた。それを引き継いだのが呉などを拠点とする海上自衛隊の掃海部隊。彼らは1991年、湾岸戦争後のペルシヤ湾の掃海に赴き、大きな成果を上げることになる。

任務の過酷さという点では、さらに上をいくのが潜水艦。館の目玉・潜水艦見学ではそのミニマムな空間を肌で感じることができる。呉は戦前も今も国内屈指の潜水艦基地。実際、港に行くと現役の潜水艦がすぐそばに浮かんでいて、そのどかさにはちよつと拍子抜けするほど。潜水艦という、「隠密」なイメージがあるのだが……。

「潜水艦も掃海も共通するのは、水面下の目に見えない仕事だということ。その意義や苦勞を一人でも多くの人に伝えるのが私た



柳川利生さん



映像による日立グループのご紹介

HITACHI NOW
<http://www.hitachi.co.jp/now/>

「てつこのくじら館」—海上自衛隊呉史料館—を公開中。
あわせてご覧ください。

「ちの使命」と言う柳川さんは、もともと日立の特約店である八洲電機(株)の営業マンとしてこの地域のビジネスに携わってきた。'98年に史料館の整備・運営をPFI (Private Finance Initiative) (つまり民間委託)で行うことが決まり、そこから日立製作所を代表企業とする10社の企業連合が誕生、提案型の競争入札で指名を獲得した。これから7年間、館は日立グループを中心とするSPC (特別目的会社) で運営される。その施設運営の責任者としてちょうど今年、八洲電機を定年退職する柳川さんに白羽の矢が立ったというわけだ。

史料館の隣には、2年前にオープンした「大和ブーム」を引き起こした大和ミュージアムがある。その人気はまだまだ衰えず、この5月で入館者は300万人を突破。それに負けじと、当史料館も1カ月半で10万人を突破。当初の年間目標が8万人だということから、すごい人気。「スタッフは、ついこの前まで潜水艦や掃海艇に乗り組んでいた人たちなんです。本当は彼らの体験を聞きながらじっくり見てほしいのですが、一方で一人でも多くの人に見てもらいたいという思いもあって。ジレンマですね」

戦後は造船不況で呉も空洞化が進んだが、近年、ルートである海軍関係の遺産を活用した観光都市へと舵を切りつつある。そこで史料館がどんな存在になっていくか楽しみだ。

●海上自衛隊呉史料館「てつこのくじら館」

広島県呉市宝町5-38 電話0823-21-6111

入場無料 火曜休館

<http://www.jmsdf-kure-museum.jp/>